英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象とした英語学習意識調査

牧野　眞貴・平野　順也

抄録

本研究では、効果的な英語リメディアル教育の実施に向け、英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象に質問紙調査を実施し、現在の学習状況や、学生の英語学習に対する意識や姿勢、そして学習意欲を高める要因を明らかにした。結果から、学生はバランスの良い指導を受けてはいるものの、文法や語彙よりもリスニングやスピーキングを多く学びたいと考えていることがわかった。また、英語が苦手で自信が持てないため、学習意欲が高まらず、英語を学習しないという傾向が見られた。さらに、試験対策重視や受動的な授業ではなく、学生の意見を取り入れた実用的で学生が退屈しない授業を行うことや、授業における教師の学生に対する働きかけなどが学習意欲を高めるのに効果的であることが示唆された。

1．研究の背景

近年、多数の大学がリメディアル教育に取り組んでいる。藤田（2006）によると、リメディアル教育とは、「本来は大学入学前に習得しているはずの高校課程の学習内容」（p.1）や知識の補習教育である。その中でも英語は積極的に行われている教科の一つだが、実際は間中（2010）が報告しているように、「中学校の段階で身に付いているはずであろう」（p.21）基礎力が欠如している学生が多い。また、英検 4 級程度の内容を扱っている大学教科書が多く使用されているというのがリメディアル教育の現状である（酒井ら、2010）。英語リメディアル教育の授業実践として、基礎的な英語力の定着のために、英検 3 級から 4 級レベルの教材を使用した既習文法項目の定着（清田、2006）、e-learning による文法や語彙の指導（田原、2011）、11 回にわたる徹底した単語テスト実施による語彙指導（武田ら、2008）などが報告されている。合田（2011）は、中学英語を理解しているか否かといった基礎的な学力が、英語リメディアル教育に関する議論の中心になる傾向が強いとしており、牧野・平野（2014）が行った英語リメディアル教育に携わる大学教員を対象にしたアンケート調査でも、教員が最も力を入れて指導する項目は文法や語彙であり、中学校や高校の文法や語彙のやり直しを行う傾向が見られた。

しかし、英語リメディアル教育は、習熟度の低さだけではなく、学習動機の希薄化など

も含めた多岐にわたる複雑な問題を抱えている。渡部（2008）は「英語が苦手になった理由は、中学校で受けた指導で上手くいかなかったからで、もしそれと同じような指導を大学で受けなければならないとしたら、それは苦痛以外の何の成果も生まれない」（p. 57）、と学習者の心理的抵抗感について述べている。佐藤ら（2010）は、リメディアル学生は、努力によって達成することができる成果や競争心に対する関心も低いとし、新井（2004）、および泉（2012）は教師の指導力不足や、学生に対する態度も学習動機減退の要因になるとしている。清田（2010）は、英語リメディアル教育は英語力向上を目標とする指導だけではなく、過去の英語学習を通して形成された、学生の低い学習意欲や動機に対して適切に対応して進めなくてはならない、と主張している。これらの要因に対し適切な対応を行わず英語の指導を行うということについて、酒井（2012）は、「習熟度の低い学生への基礎知識の指導をまるで教員が学生の口に食べたいと思わない英語の基礎知識を、一生懸命に頬張らせようとしている」（p.148）と表現している。

また、学力向上を主な目標に掲げた授業では、「教科書のなんとなくの理解」（酒井、2012、p. 148）で完結するという、クラスでの取り組みという限られた枠内での活動に留まってしまう可能性がある。例えば、習熟度別にクラスを編成し、それぞれの学生のレベルに応じた指導を行った場合、学生は自分が振り分けられたレベル内の学習にのみ焦点をあて、それ以上の向上に対して興味を示さない、と清田（2010）は論じている。このような授業では、学生は「一応『取り組む』ことはできる。そのため、表面上はおとなしく学習し、授業は成立しているように見える」（清田、2010, p.37）が、これでは動機も高まらず、英語学習の価値を見出すこともないだろう。これは、酒井ら（2010）が「変則的な自己効力感」（p. 15）と呼んでいる現象であり、学力に重点をおき、リメディアル学生の実力に適した授業を行った場合、「英語学習の意識を教室内に閉じ込め、授業での課題には何とか対処できるという意識（変則的な自己効力感）」（p. 15）を生みだす可能性があることを指摘している。英語リメディアル教育は、単純に学力の向上だけを目標にしているだけでは不十分であろう。酒井（2011a）は学習者の文法力補習の目的で教材開発に取り組んだ。結果、学習者が英語学習に単位取得以上の意義を見出さなければ学習効果が期待できず、そのためには自律性の育成が必要であると結論付けている。以上を踏まえると、英語リメディアル教育においては、学生が「英語を積極的に学びたい」と思う、学習意欲を高める指導が必要であるといえるだろう。

英語リメディアル教育が効果的であるためには、まず学習者の意識改革に努めなくてはならないと考えられるが、動機づけや学習意欲の向上を目的とした実践の数々が報告されている。牧野（2010）では、英語に苦手意識を持つ大学生のクラスにおいて、学生が中学校や高校で経験したような暗記中心の学習方法ではなく、授業にアクティビティを取り入

れ、仲間と楽しく学べるように工夫した授業を試みた。その結果、学生の学習姿勢を大きく改善させることができた。また、牧野（2013a、2013b）では、大学1年生の英語リメディアル教育対象クラスにおいて、高校英語授業についての感想を自由に書かせ、それを分析して学生に英語苦手意識を持たせた原因を探り出した。それを基に高校英語授業とは異なる授業をデザインした結果、リメディアル学生の英語力と英語に対する自己効力感を有意に高めることができた。田邊（2003）は、英語が苦手な学生には、学生の意見を反映させた興味や関心の持てる教材で学習意欲を高めることができると主張しているが、Twitterを使用したライティング（山岡、2011）、オーセンティック教材によるリーディング（山岡、2012）、洋楽を利用したリスニング（牧野、2012）、そして、携帯電話を利用したスピーキング（牧野、2014a）など、独創的な取り組みによって、学力だけではなく、学習意欲の向上や意識の改善の成功事例が報告されている。

平野・牧野（2014）では、効果的な指導を検討するため学生の視点に焦点を当て、リメディアル学生が求める授業活動を問う自由記述式のアンケート調査を実施した。それによると、リメディアル学生の多くは中学校や高校で学んだ文法や語彙のやり直し学習には興味を示しておらず、映画や音楽といった教材の利用、コミュニケーション能力の向上、そしてそのために教育熱心な教員を主に求めていることが示唆された。しかしながら、平野・牧野（2014）の調査では、学習意欲を向上させる要因について、明確な回答を得ることができなかった。さらに、質的なアンケートであったため、回答者が47名と十分な数とは言えない。効果的な英語リメディアル教育を実践するためには、学生が求める活動を提示するだけではなく、学習意欲を高める手段を明確にすることが必要であろう。そのためには、回答者数を増やし、量的に分析を行うアンケート調査の実施が一つの研究手段となるのではないか。

２．研究の目的

英語リメディアル教育の質を高めようと研究者たちが様々な指導法を実践し、それを報告している。それに、学生の考えや希望を取り入れることで、効果的な授業が実践できると考えられる。学生の英語苦手意識を克服し、英語に対する学習意欲を高めるためには、学生の立場から見た英語リメディアル教育の現状を把握し、学習意欲を高める要因を明らかにすることが必要ではないか。またこれまでの英語リメディアル教育の研究においては、どのような指導項目を中心に授業が展開され、学生達が何を学びたいと考えるかに触れたものが少ない。従って、本研究では、英語リメディアル教育を必要とする大学生を対象に質問紙調査を実施し、現在の学習状況や、学生の英語学習に対する意識や姿勢を明らかにするとともに、学習意欲を高める要因を探ることを目的とする。以下の3点を研究課

題とし、調査を実施する。

1．学生たちは現在授業で何を学び、また何を学んでみたいと考えているのか。

2．学生たちの英語学習に対する意識や姿勢はどのようなものであるか。

3．学生の英語に対する学習意欲は何によって高められるのか。

3．研究方法

3.1　研究協力者

本研究では、関西地区にある私立大学に通う英語非専攻の大学生 229 名[1)] を対象として質問紙調査を実施した。研究協力者（以下学生）は全員が、英語習熟度別クラス編成の下位クラスに在籍している。質問紙の最初の部分で学生の基本情報（学年、英語に対する好感度、英語力、英語学習の目的[2)]）について尋ねた。それを表 1 にまとめる。これを見ると、学生の英語力や英語に対する好感度の低さが確認でき、英語学習の目的についても単位を取る、あるいは目的がない、など英語学習に意欲的でないことが窺える。

3.2　質問紙調査概要

本調査は、2013 年 12 月から 2014 年 1 月にかけて実施され、質問紙の回収率は 100% であった。質問紙は、阿川ら（2011）、津村（2010）、そして酒井ら（2010）を参考に筆者らが作成した。これらの研究を参考にした理由は、英語を学ぶ意欲が見られない学生を対象として、英語学習に対する動機減退や学習意欲喪失の要因を調べたものであり、何が学生の学習意欲に影響するかのヒントが得られるものであったからである。データの質を確保するために質問は 40 項目に留めるように心がけ、学習に対する意識に関する質問項目に、学生が学んでいる現状や希望する活動に関する質問を加えた。質問の内訳であるが、上記の基本情報 4 問に加え、現在の学習状況や今後学んでみたい学習項目について尋ねる質問が 12 問、英語学習に対する意識についての質問が 8 問、学習意欲を高める要因について尋ねる質問が 16 問であった。回答には 1（全くそう思わない）から 5（強くそう思う）までのリカートスケールを用いた。質問紙については、内的整合性を検討するため信頼係数を求めたところ、現在の学習状況や今後学んでみたい学習項目について尋ねる質問ではクロンバック α =0.88、英語学習に対する意識についての質問ではクロンバック α =0.79、学習意欲を高める要因について尋ねる質問ではクロンバック α =0.87 となり、内的整合性が認められた。質問紙は日本語で書かれ、この回答が学生の成績に一切影響しないこと、そして調査結果は研究目的以外には使用しないことを明記し、匿名式で回答を求めた。なお、質問紙については付録を参照されたい。

表１　研究協力者の基本情報

		人数	%
学年	１年生	68	29.7
	２年生	69	30.1
	３年生	92	40.2
英語に対する好感度	好き	76	33.2
	嫌い	153	66.8
TOEIC スコア	200 点以下	39	17.0
	205-250 点	69	30.1
	255-300 点	68	29.7
	305-350 点	46	20.1
	355 点以上	7	3.1
英語学習目的	単位を取るため	130	56.8
	日常会話程度の英語力をつけるため	39	17.0
	社会に出て役立つ英語力をつけるため	22	9.6
	TOEIC などの資格試験のため	21	9.2
	目的はない	17	7.4

Note. N=229

3.3　分析

回答は、各質問項目の回答傾向と平均、標準偏差を提示し、各質問項目の平均点が 2.99 以下を「否定傾向がある」､3.01 以上を「肯定傾向がある」､3.00 を「否定でも肯定でもない」として分析した。さらに、英語学習に対する意識と姿勢についての質問、および学習意欲を高める要因について尋ねる質問については、4.2 および 4.3 に示す一部の項目の相関関係についても分析を行い、習熟度の低い学生の英語学習に対する意識と姿勢や学習意欲を高める要因にどのような関係があるかについても検証を行った。

４．結果

4.1　学習の現状と今後希望する学習内容

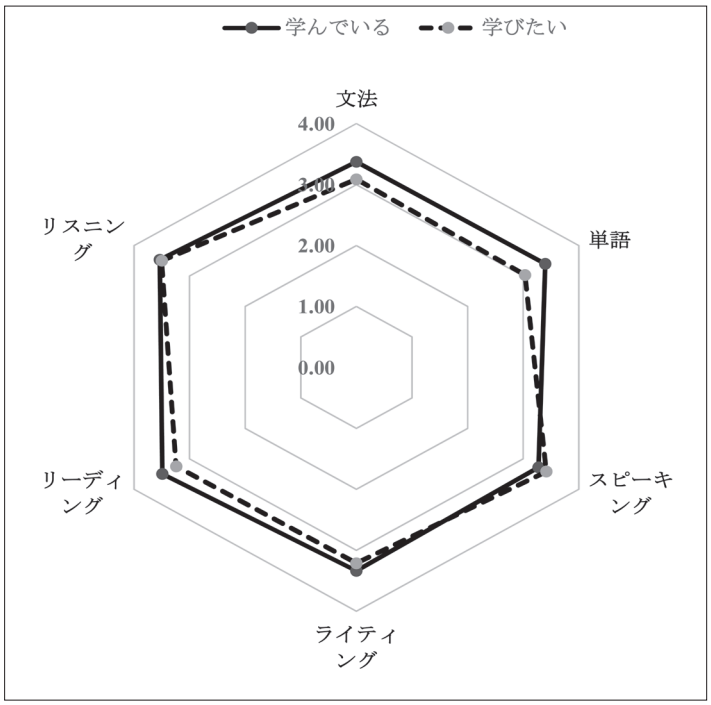
学生が現在どのような学習項目を中心に英語を学んでいるか、また自分たちが学びたいと思っているものは何であるかを尋ねたところ、表２のような結果になった。各項目の回答平均値のバランスを見るため、表２の結果を図１に表わす。

表２　現在学んでいる学習内容および今後希望する学習内容

	文法	単語	スピーキング	ライティング	リーディング	リスニング
学んでいる	3.37	3.39	3.28	3.34	3.49	3.54
学びたい	3.09	3.03	3.42	3.21	3.24	3.50

Note. N=229

図１　現在学んでいる学習内容および今後希望する学習内容



4.2　英語学習に対する意識と姿勢

英語学習に対する意識や姿勢についての回答結果を表３に示す。否定傾向のある項目数が肯定傾向のある項目数を上回っていた。これらの否定傾向がある項目の関係がどのようであるかを検証するため、相関分析を行った。結果を表４に示す。これを見ると、中程度の相関が複数の項目で確認された。

4.3　英語に対する学習意欲を高める要因

英語の学習意欲を高める要因についての回答結果を表５に示す。これを見ると、肯定傾向のある項目の数が否定傾向のある項目の数の２倍以上となっていることがわかる。さらに、4.2 と同様に、否定傾向のある項目の相関分析を行った。結果を表６に示す。これを見ると、中程度の相関が複数の項目で確認された。

表 3　英語学習に対する意識と姿勢

			平均	標準偏差
肯定傾向	Q22	英語の授業態度は良い	3.55	0.97
	Q24	英語の授業に集中することができる	3.23	0.89
	Q21	英語で良い成績をとることは自分にとって重要である	3.06	1.12
否定傾向	Q17	英語学習に興味がある	2.87	1.20
	Q18	英語授業は好きだ	2.79	1.13
	Q19	自分の英語力を高めることができる	2.75	0.99
	Q20	英語に対する学習意欲は高い	2.61	1.05
	Q23	英語を勉強する習慣がある	2.34	1.03

Note. N=229

表 4　英語学習に対する意識と姿勢否定傾向項目相関係数

		Q17	Q18	Q19	Q20	Q23
Q17	Pearson の相関係数	1	.637	.347	.604	.237
	有意確率 （両側）		.000	.000	.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q18	Pearson の相関係数	.637	1	.461	.625	.265
	有意確率 （両側）	.000		.000	.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q19	Pearson の相関係数	.347	.461	1	.508	.304
	有意確率（両側）	.000	.000		.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q20	Pearson の相関係数	.604	.625	.508	1	.455
	有意確率 （両側）	.000	.000	.000		000
	N	229	229	229	229	229
Q23	Pearson の相関係数	.237	.265	.304	.455	1
	有意確率 （両側）	.000	.000	.000	.000	
	N	229	229	229	229	229

5．考察

5.1　学習の現状と今後希望する学習内容

現在学んでいる学習項目は図 1 より、ほぼバランスよく指導されていることが確認できる。学びたい項目について見ると、第 1 位のリスニングと最下位の単語には 0.47 の差があり、また文法との差も 0.41 であることから、現在学んでいる学習項目間の差と比較して、

表５　英語に対する学習意欲を高める要因

			平均	標準偏差
肯定傾向	Q36	教師が信頼できると思うと学習意欲が高まる	3.74	0.96
	Q33	勉強する方法がわかると学習意欲が高まる	3.66	1.07
	Q29	メリハリのある授業は学習意欲が高まる	3.60	0.97
	Q35	授業で学んでいることが将来役に立つと思うと学習意欲が高まる	3.60	1.07
	Q28	自分がしたいと思っていることを授業でする機会があると学習意欲が高まる	3.54	1.04
	Q34	学習する目標がわかると学習意欲が高まる	3.50	1.13
	Q38	教師の熱意を感じると学習意欲が高まる	3.38	0.97
	Q37	教師が自分の英語力を理解していると感じると学習意欲が高まる	3.37	0.97
	Q31	英語を使う場面があると感じると学習意欲が高まる	3.29	1.02
	Q40	教科書がおもしろいと感じたとき学習意欲が高まる	3.25	1.11
	Q39	グループワークで英語を学ぶと学習意欲が高まる	3.20	1.13
否定傾向	Q25	中学校、高校の学習内容のやりなおしをすると学習意欲が高まる	2.88	1.16
	Q30	小テストが多いと感じると学習意欲が高まる	2.69	1.08
	Q27	TOEIC などの資格試験の勉強をすると学習意欲が高まる	2.66	0.99
	Q26	中学校、高校と同じ授業方法で英語の授業が行われると学習意欲が高まる	2.63	0.99
	Q32	覚えることが多いと感じると学習意欲が高まる	2.51	1.02

Note. *N*=229

表６　英語に対する学習意欲を高める要因否定傾向項目相関係数

		Q25	Q26	Q27	Q30	Q32
Q25	Pearson の相関係数	1	.667	.402	.266	.275
	有意確率 （両側）		.000	.000	.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q26	Pearson の相関係数	.667	1	.466	.305	.380
	有意確率 （両側）	.000		.000	.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q27	Pearson の相関係数	.402	.466	1	.433	.417
	有意確率（両側）	.000	.000		.000	.000
	N	229	229	229	229	229
Q30	Pearson の相関係数	.266	.305	.433	1	.502
	有意確率 （両側）	.000	.000	.000		.000
	N	229	229	229	229	229
Q32	Pearson の相関係数	.275	.380	.417	.502	1
	有意確率 （両側）	.000	.000	.000	.000	
	N	229	229	229	229	229

学びたい項目間の差のほうが大きいことがわかる。学びたい学習項目の数値について見てみると、数値の高い順から 1）リスニングとスピーキング、2）リーディングとライティング、3）単語と文法の 3 つのグループに分類できることがわかる。この順序と学習項目を見ると、自分達がこれまで学んだ経験が少ないものをより学びたいと学生が考えているのではないか。学んだ文法が定着しないため、中学校や高校では基礎的な文法の復習や語彙指導が繰り返され、スピーキングやリスニングの指導にまで行き届かなかったことが考えられる。それゆえ、学生が文法や単語を強く学びたいとは思わないのかもしれない。さらに、現在学んでいる項目と、学びたい項目を比較すると、文法、単語、リーディング、ライティングについては、学びたい項目のほうが数値は低く、リスニングはほぼ同程度、スピーキングについては高いということが確認できる。これは、先述の学びたい学習項目の順位と関連があるように思われ、これまで学ぶ機会が多かったと考える学習項目よりも、学び足りないと考えるものの学習を希望しているのではないか。4.3 で述べた「中学校、高校の学習内容のやりなおしをすると学習意欲が高まる」や、「中学校、高校と同じ授業方法で英語を授業が行われると学習意欲が高まる」が否定傾向であったことから、大学入学以前に学んでいた文法や単語の復習よりも、これまで学ぶ機会が少なかったコミュニカティブな学習 [3] である英語を話すことや、コミュニケーションに必要となる英語を聞くといった力を身に付けたいと考えていることが示唆される。

5.2　英語学習に対する意識と姿勢

肯定傾向のある項目を見ると、表3より「英語の授業態度は良い（3.55）」が最も高く、次いで「英語の授業に集中することができる（3.23）」となっていることから、英語学習に対する意識は低いが、自身の学習姿勢にはそれほど問題を感じていないことが窺える。

次に、否定傾向のある項目を見ると、英語が苦手で自信が持てないため、学習意欲も高まらず、英語を学習しないという負の連鎖のような傾向が見受けられる。表4の相関分析の結果を見ると、中程度の相関が複数の項目でみられ、英語が好きでないから英語に興味が持てない、また、英語が好きではないから英語力を高める自信がない、といった様子が窺える。また、学習意欲が低いため、英語学習の習慣が身につかないことも推測できる。さらに、「英語に対する学習意欲は高い（2.61）」は、全ての否定傾向のある項目と中程度の相関が見られた。つまり、全ての否定項目が学習意欲となんらかの結びつきがあると言えよう。従って学習意欲を高めることで、他の否定傾向のある項目についても改善され、英語学習に対する意識も向上すると考えられる。授業に集中でき、授業態度にも問題を感じていないと学生が考えているのであれば、英語学習に対する意識を高めることで、積極的な授業参加にも期待ができるのではないか。

5.3　英語に対する学習意欲を高める要因

肯定傾向の上位項目として表5より、「教師が信頼できると思うと学習意欲が高まる（3.74）」、「勉強する方法がわかると学習意欲が高まる（3.66）」、「メリハリのある授業は学習意欲が高まる（3.60）」、「授業で学んでいることが将来役に立つと思うと学習意欲が高まる（3.60）」、「自分がしたいと思っていることを授業でする機会があると学習意欲が高まる（3.54）」、「学習する目標がわかると学習意欲が高まる（3.50）」、が確認できる。これらをみると、明示的な学習方法の指導や、学習目標の設定、学生との人間関係の構築など授業における教師の学生に対する働きかけが学習意欲を高めると考えられる。また、学生の意見を取り入れることや、実用的で学生が退屈しない授業を行うことも、学生の学習意欲を高めると言えるであろう。下位の肯定傾向項目を見ても、「教師の熱意を感じると学習意欲が高まる（3.38）」、「教師が自分の英語力を理解していると感じると学習意欲が高まる（3.37）」というように教師に関する項目が複数あり、学習意欲向上には教師の力が必要であることが窺える。

次に否定傾向のある項目を見ると、中学校や高校の英語授業のような指導スタイルや、外部試験対策を行う授業が学習意欲を下げていることが考えられる。表6の相関について見ると、中程度の相関が複数の項目でみられ、中学校、高校英語のやり直しや外部試験に向けた学習、英語力の測定が学習意欲に負の影響を与えていることが窺える。4.2では、

「英語力を高めることができる（2.75）」に否定傾向が見られたことより、英語力を高めることをあきらめていることが、試験勉強に身が入らないことにつながっているとも推測できる。さらに英語への興味が低く学習習慣もないので、外部試験だけではなく、英語を覚えるなど通常の小テストや定期試験に向けた学習を避けたいと考えていることが理解できる。「TOEIC などの資格試験の勉強をすると学習意欲が高まる（2.66）」が否定傾向のある項目全てと中程度の相関がみられ、良い点数が取れる自信がないのにも関わらず英語を勉強しなくてはいけないという学習の必要性が学生の学習意欲を下げていると考えられる。

６．まとめ

本研究の結果、学生はバランスの良い授業を受けてはいるものの、文法や語彙よりもリスニングやスピーキングを多く学びたいと考えていることがわかった。学習姿勢は悪くはないと自覚しているが、英語学習に対する意識は低く、否定傾向のある質問項目の相関関係から判断して、学習意欲を高めることで、英語学習に対する意識も改善すると考えられる。そのためには、試験対策重視や中学校、高校のような英語授業のスタイルではなく、学生の意見を取り入れた実用的で学生が退屈しない授業を行うことが効果的であろう。また、明示的な学習方法の指導や、学習目標の設定、学生との人間関係の構築など、授業における教師の学生に対する働きかけも学習意欲を高めるということがわかった。

７．今後に向けて

学生の英語に対する学習意欲を高め、積極的な授業参加を促すためには、第１章で報告されたような取り組みが有効と考えられる。酒井（2011b）は「実践記録は、定性的または定量的なデータを取りにくいので、一般化しにくく、論文としてまとめにくい」（p.66）としているものの、実践記録は英語教育の発展に欠くことができず、効果的な実践法を広く教員間で共有していくべきであるとも述べている。換言すれば、牧野（2012、2014a）や山岡（2011、2012）が取り組んでいるような学習意欲を高める取り組みを理論化し、指導法を充実していく必要があり、そこから確立された指導法は、英語リメディアル教育に従事する教員に貢献するものになると考える。そのためには、本研究で明らかにした学生の視点も必要と考えられ、学生が授業に何を求めるか、どのようにすれば学習意欲を高めるかについても知ることで、より効果的な指導法が検討できるのではないか。そこで、本研究結果を踏まえ、英語リメディアル教育を必要とする学生の英語学習意欲を向上させる指導に向けて、以下の提案を行う。

まず、「自分がしたいと思っていることを授業でする機会があると学習意欲が高まる」、「英語を使う場面があると感じると学習意欲が高まる」が肯定傾向であることから、授業

でスピーキングやリスニング指導の割合を多くするのが良いのではないか。英会話を授業に取り入れ、英語がコミュニケーションのツールであると実感させることで、英語を話す楽しさを知ったり、「授業で学んでいることが将来役に立つ」を意識したりするかもしれない。

次に、授業における学習目標の設定を行うこと、そしてそれを達成するためにどのように学習するかを教師が明示的に指導することが必要だと考える。牧野（2014b）では、リメディアル教育を必要とする大学生に、授業における学習目標を設定させた。学生は文法、リーディング、語彙を学んだが、各自が達成可能であると考える目標を１～２程度設定し（授業で練習した発音を生かして単語を覚える、主語を見て動詞が判断できるようになる、など）、それを達成するよう授業に取り組ませた。その結果、「目標をたてているので、何を勉強するかはっきりする」、「目標に向かって授業を受けるのと、目標がないのでは集中力が違うように感じる」、「目標を立てることで、学習意欲が高まる」といった意見が聞かれ、学生の英語学習に対する自己効力感が有意に高まった。本研究においても「学習する目標がわかると学習意欲が高まる」、「勉強する方法がわかると学習意欲が高まる」がともに肯定傾向であったことから、 目標設定により学生の学習意欲が高められることが示唆される。

最後に、授業に対する不安軽減について提案する。本研究結果より、学習意欲が高まらない理由として、試験やそれに向けた学習などが考えられるが、大学授業において試験実施は避けられない。しかし、試験だけで学生を評価するのではなく、学生の授業に対する姿勢や貢献度などにも注目すべきではないか。「教師が信頼できると思うと学習意欲が高まる」は最も高い肯定傾向を示しており、「教師が自分の頑張りを見てくれている」と学生が実感することで、教師に対する信頼感が生まれ、教師と学生の人間関係が構築されると考えられる。授業に積極的に参加すれば、英語が苦手であっても評価されるということを学生に理解させることが必要であろう。さらに、英語力の測定については筆記試験ではなく、例えばスピーチなどを行わせ、声の大きさや顔の表情、ジェスチャーなどの表現力でも測定を行うことが可能ではないか。

８．おわりに

本研究結果は、一部の学生を対象に実施された質問紙調査の分析であるため、一般化することはできない。しかし、このような学生の意識を知ることは、教師の授業改善につながるであろう。英語リメディアル教育質向上のためには、教師の力だけでなく、授業を受ける学生の意識の把握も必要だと考える。本研究結果を踏まえた提案をもとにより良い授業づくりを行い、英語が苦手な大学生の学習意欲を高めて行きたい。また、優れた指導実

践を理論化し、それに基づく指導法を構築することで、英語リメディアル教育に従事する教員に貢献したいと考える。

（平野順也　第1章～第2章、牧野眞貴　第3章～第7章）

注

1）研究協力者は大学1～3年生である。英語学習の年月の長さが学習意欲の差がアンケート回答に影響を及ぼすことが考えられるため、1年生×2年生、1年生×3年生、2年生×3年の組み合わせでアンケートQ17～40までの回答について、対応の無い*t*検定を行い分析した。結果、1年生と2年生、および2年生と3年生では全ての項目について有意差が見られなかった。1年生と3年生においては、Q24「英語の授業に集中することができる」で、3年生の回答が1年生より有意に高いことが確認された。有意差がある項目が1つのみであり、これが結果に大きく影響しないと判断し、本研究では3学年のデータをまとめて分析する。

2）質問紙を作成するにあたり、事前調査として、本研究に協力をしていない大学生47名に、英語学習の目的について自由に記述させた。それをもとに、1. 社会に出て役立つ英語力をつけるため、2. 日常会話程度の英語力をつけるため、3. TOEICなどの資格試験のため、4. 単位をとるため、5. 目的はない、の5つの英語学習の目的を設定した。

3）牧野（2013a）では、学生は高校英語授業でコミュニカティブな英語を学ぶ機会がほとんどなかったとしている。

参考文献

阿川敏恵・阿部恵美佳・石塚美佳・植田麻実・奥田祥子・カレイラ順子・佐野富士子・清水順（2011）.「大学生の英語学習における動機減退要因の予備調査」“The Language Teacher”　第35号，11-15.

新井貴和（2004）.「何が外国語学習者のやる気を失わせるか？：動機減退の原因とそれに対する学習者の反応に関する質的調査」『東洋学園大学紀要』第12号，39-47.

藤田哲也（2006）.「初年次教育の目的と実際」『リメディアル教育研究』第1巻第1号，1-9.

合田美子（2011）.「リメディアル教育と自己調整学習：自分の学習を振り返るところからはじめてみる！」『英語教育』第59号第12巻，16-19.

平野順也・牧野眞貴（2014）.「習熟度の低い大学生を対象とした英語授業意識調査：動機づけのヒントを求めて」『言語エキスポ 2014 予稿集』36-37.

泉惠美子（2012）.「スローラーナーのつまずきの原因を探る」『英語教育』第 61 号第 4 号，10-12.

清田洋一（2006）.「英語教育におけるテキスト教材の活用」『リメディアル教育研究』第 1 巻第 1 号，53-60.

清田洋一（2010）.「リメディアル教育における自尊感情と英語学習動機」『リメディアル教育研究』第 5 巻第 1 号，37-43.

牧野眞貴（2010）.「英語苦手意識を克服させる授業デザイン－スポーツ学生を対象として－」『近畿大学英語研究会紀要』第 6 号，125-138.

牧野眞貴（2012）.「英語リスニングにおける洋楽聞き取りの効果検証：英語に苦手意識を持つ大学生を対象として」『リメディアル教育研究』第 7 巻第 2 号，172-180.

牧野眞貴（2013a）.「英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり」『リメディアル教育研究』第 8 巻第 1 号，172-180.

牧野眞貴（2013b）.「英語リメディアル教育対象クラスにおける授業改善の試み－スポーツ推薦入学生クラスの事例報告－」『近畿大学法学』第 6 巻第 2・3 号併号，351-367.

牧野眞貴（2014a）.「リメディアル教育対象クラスにおける携帯電話動画撮影機能を利用したスピーチトレーニング実践報告」『Language Education & Technology』第 51 号，297-318.

牧野眞貴（2014b）.「英語リメディアル教育における自己調整学習の試み」『リメディアル教育研究』第 9 巻第 2 号，202-208.

牧野眞貴・平野順也（2014）.「英語リメディアル教育の現状を探る：教員の意識調査から見えてくること」『リメディアル教育研究』第 9 巻第 2 号，181-192.

間中和歌江（2010）.「基礎レベルの大学生に中学生を指導させる試み」『リメディアル教育研究』第 5 巻第 1 号，21-27.

酒井志延・中西千春・久村研・清田洋一・山内真理・間中和歌江・合田美子・河内山晶子・森永弘司・浅野亨三・城一道子（2010）.「大学生の英語学習の意識格差についての研究」『リメディアル教育研究』第 5 巻第 1 号，9-20.

酒井志延（2011a）.「リメディアルと向き合う」『英語教育』第 59 巻第 12 号，10-12.

酒井志延（2011b）.「日本の英語学習者の認知方略使用構造について」『リメディアル教育研究』第 6 巻第 1 号，55-70.

酒井志延（2012）.「日本の英語学習者の認知方略使用に影響を与える要因について」『リメディアル教育研究』第 7 巻第 1 号，141-154.

佐藤敏子・中川武・山名豊美（2010).「なぜ学習効果があがらないのか：学習動機・学習方法と学習効果」『つくば国際大学研究紀要』第 16 巻，23-39.

武田采子・池頭純子・齋藤真弓（2008).「リメディアル教育における英単語テスト活用に関する考察：短期大学英語科における実践」『リメディアル教育研究』第 3 巻第 2 号，68-74.

田原博幸（2011).「自動繰り返し学習機能付き e ラーニングの有効性」『英語教育』第 59 巻第 12 号，28-30.

田邉義隆（2003).「無気力な生徒にいかに授業参加を促すか：指導困難校における授業実践を踏まえて」『近畿大学語学教養部紀要』第 2 巻第 3 号，113-130.

津村修志（2010).「英語嫌いに対する学習意欲喪失要因の影響」『大阪商業大学論集』第 6 巻第 2 号，35-48.

渡部友子（2008).「『中学・高校のやり直し』ではないレメディアル教育：本学での英語教育の実践から」『富山県立大学紀要』第 18 号，57-66.

山岡華菜子（2011).「リメディアル対象クラスにおける学生のやる気を引き出すライティング活動」『リメディアル教育研究』第 6 巻第 2 号，82-90.

山岡華菜子（2012).「英語リメディアル教育でのオーセンティック教材の使用」『リメディアル教育研究』第 7 巻第 1 号，165-175.

付録

英語学習に対する大学生意識調査

調査の目的

これは、みなさんの英語学習および授業に対する意識調査です。今後の英語教育の研究に活かされますので、率直にお答えください。なお、この調査の結果が皆さんの成績に影響することは一切ありません。また、この調査の結果を上記の目的とは無関係の目的で用いることは一切ありません。

最初に、あなた自身についてお聞きします。自分にあてはまる選択肢を一つ選んでマークして下さい。

1	学年	1. 1 年生　2. 2 年生　3. 3 年生　4. 4 年生　5: その他
2	英語が好きですか、嫌いですか？	1. 好き　2. 嫌い
3	TOEIC スコアは次のどの点数の範囲にあてはまりますか？	1. 200 点以下　2. 205-250 点　3. 255-300 点 4. 305-350　5. 355 以上
4	大学における英語学習の目的は？	1. 社会に出て役立つ英語力をつけるため　2. 日常会話程度の英語力をつけるため　3.TOEIC などの資格試験のため　4. 単位をとるため　5. 目的はない

以下の 5 ～ 40 について、選択肢 1：「全くそう思わない」～ 5：「強くそう思う」の中で、自分の気持ちにもっとも近い数字を選んでマークして下さい。

5	大学の英語授業では文法をよく学んでいる
6	大学の英語授業では単語をよく学んでいる
7	大学の英語授業ではスピーキングをよく学んでいる
8	大学の英語授業ではライティングをよく学んでいる
9	大学の英語授業ではリーディングをよく学んでいる
10	大学の英語授業ではリスニングをよく学んでいる
11	大学の英語授業では文法を重点的に学びたい
12	大学の英語授業では単語を重点的に学びたい
13	大学の英語授業ではスピーキングを重点的に学びたい
14	大学の英語授業ではライティングを重点的に学びたい
15	大学の英語授業ではリーディングを重点的に学びたい
16	大学の英語授業ではリスニングを重点的に学びたい
17	英語学習に興味がある
18	英語授業は好きだ
19	自分の英語力を高めることができる
20	英語に対する学習意欲は高い
21	英語で良い成績をとることは自分にとって重要である
22	英語の授業態度は良い
23	英語を勉強する習慣がある

24	英語の授業に集中することができる
25	中学校、高校の学習内容のやりなおしをすると学習意欲が高まる
26	中学校、高校と同じ授業方法で英語を授業が行われると学習意欲が高まる
27	TOEIC などの資格試験の勉強をすると学習意欲が高まる
28	自分がしたいと思っていることを授業でする機会があると学習意欲が高まる
29	メリハリのある授業は学習意欲が高まる
30	小テストが多いと感じると学習意欲が高まる
31	英語を使う場面があると感じると学習意欲が高まる
32	覚えることが多いと感じると学習意欲が高まる
33	勉強する方法がわかると学習意欲が高まる
34	学習する目標がわかると学習意欲が高まる
35	授業で学んでいることが将来役に立つと思うと学習意欲が高まる
36	教師が信頼できると思うと学習意欲が高まる
37	教師が自分の英語力を理解していると感じると学習意欲が高まる
38	教師の熱意を感じると学習意欲が高まる
39	グループワークで英語を学ぶと学習意欲が高まる
40	教科書がおもしろいと感じたとき学習意欲が高まる